

HAMAMATSU
GUIDE BOOK

カツドウ

Katsu-do

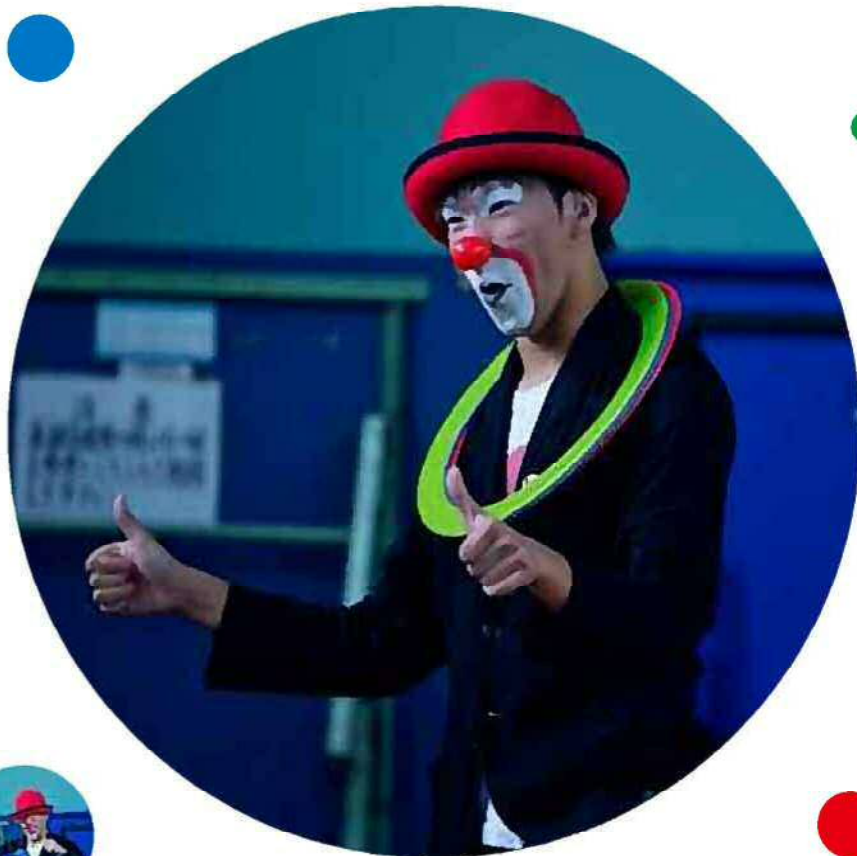
ココロのうちからわき上がる
メロディ、リズム、言葉、
そのままの「自分」を表現すること。
または人。





きぼうくん

〈ブログ〉 大道芸人きぼうのこころ
<http://ameclo.jp/clown1616/>
 〈YouTube〉 デフメイトdeafmate
<https://www.youtube.com/user/deafmate0303>



チャップリンが原点だった。

映画の中に台詞はひと言もなかった。無声コメディ映画の王様・チャップリンの「給料日」。顔の表情と身体の動きだけで人々を魅了するバント・マイムに、幼かったきぼうくんは釘づけになった。音のない世界に生きていても、笑えるし理解できる。ひと言も話さずに演技をすれば、自分も誰かに笑いを届けられるんじゃないだろうか？

いつか大道芸人になろう。そんな気持ちを抱え、大道芸のグループでレッスンしたり独学で練習を重ねていたある日、機会は突然やってきた。2011年、東日本大震災。

多くの尊い命が奪われていく現実が、きぼうくんを動かした。悲しい気持ちを癒したい。癒せる存在になりたい。

その年の冬、浜松駅でケリラパフォーマンスを行った。ノーメイクのバントマイムに登場するのは、命を弔う花、奇跡の三本松。

おばあちゃんと孫が一枚の紙を差し出した。

「あなたのパフォーマンスとてもよかった」

観客とパフォーマンスは、見る人と演じる人ではなく、ともに作り上げる人。ときに観客も巻き込んで、ストーリーを紡いでいく。見ている人たちは、筆談や身ぶりで、気持ちを伝えてくれる。

きぼうくんは思う。聞こえる人も、聞こえない人も、もっともっと、笑わせたい。癒したい。

「人生を、謳歌したい」

全国各地からオフアアの声もかかる。夢は日本一周、そしてチャップリンの故郷イギリスにも行きたい、とも。

どこかでパフォーマンスをするきぼうくんを見かけたら、足を止めてみてください。

驚異のバンドが登場した。ダイスケ (Vocal)、こうしゅん (Guitar)、美奈 (Drums) をメンバーとした3ピースバンド「南中野」だ。即興演奏による、ときにぶつかり合い、ときに融合するステージは、既存の音楽ジャンルの枠をはるかに超えた新しさがある。

3年前、自然と集まって結成された南中野だが、これまでに幾度となく解散の危機を乗り越えてきたという。大きく変わったのは、当初キーボードだったダイスケが、ボーカルに転向したこと。彼のシャウト (天才的なセンスだ) と熱いパフォーマンスを、こうしゅんのギターと美奈のドラムが包み込むように削りあげるステージは、多くの人を魅了する。

フアンの一人は「夜ライトに浮かび上がる中で、演奏が最高」と話してくれたが、彼ら自身は「伝えたいものなど、何もない」と控え目だ。それでも「かっこいい曲を作りたい、これからも続けていきたい」と夢を語る。それでは聴いて下さい。

南中野で「デスクラ (デスクメタルキラキラ星)」!



南中野の ちゅう なん



南中野

カツドウの全貌、演奏スケジュールはFacebook「南中野(なんちゅうの)」でチェック!

詩人の名は、ムラキング。

最初は、誰にも見せない心の呟きをノートに書き綴っていたという。死にたい。もう無理。たまにそれを目にした誰かに「こういうのを書いてはダメ」と言われたけれど、胸の内にわき上がる言葉は止まらない。

あるとき、すすめられて彼

女との別れや恋心を詩にしてみた。「死にたい」が減った。誰かが見てくれる詩は、自分の中で「逃げ場」を作ることになった。うまくいけば詩もうまくいく。「これいいんじゃない？」と言われることも「こんなのはムラキングじゃない」と言われること

も、すべて「自分が存在する意味」を探すこと。

即興で詩を書くのは好きだ。頭上から言葉が降ってくる。目の前の人にふさわしい言葉を探して書いたものが喜ばれるとうれしい。だから詩を書く。

名言は今日も生まれる。



人に笑われる子
弱くもなれた
だがうそは何もできなくて
泣き
たまたまようとしてた

2011

ムラキング

恋愛妄想詩人。毎日ひたすら詩を書く日々。そして、終わらない思春期。時に、ポエトリーリーディングもやっています。活動情報は、NPO法人クリエイティブサポートレッツのHPをチェック！ <http://cslets.net/>

ここから生まれたことの一つが「魅惑的生人四季」。地元の成人式に出られない一組の親子のために、50人ものボランティアスタッフが集まった。特別支援学校の同級生約30人が参加した年もある。

今、応援する人、企業や団体から、たくさんの手が差しのべられる。それは一方がもう片方を支える関係ではなく、どちらにとっても楽しくてメリットがあるつながり。年に数回、イベントで「コーヒーとお菓子を提供する「スターボックス」からは「障がいをもったお客様への接し方がわかった」と声が届く。

お互いに居心地のいいイパシヨが少しずつ、広がっていく。魔法のように、ただ魔法じゃない。彼らが目指す場所に、一歩ずつ近づいているのだ。

つながって、 広がっていく magic

障がいをもつ子どもと、その家族とが、安心して休日を通せる居場所はないだろうか。たとえば、音楽や娯楽を自由に楽しめる場所——。

そんな思いがカタチになったのが magic heart。道行く若者やミュージシャンにも声をかけ、イベントやレクリエーションを開催。一度も障がいに関わった経験がなかった人たちをも巻き込んで、カッドウは広がっていく。



魅惑的倶楽部
「エキゾチック」
クラブ

魅惑的(エキゾチック)倶楽部
さまざまな社会問題を解決するために、音楽をはじめとするエンターテイメントを手法として、人と人との交流活動を行っています。

ふたりの
日常

今日は
カラオケ



← 後藤さん

亮賀くん →



← 盛り上げる後藤さん

→ 踊る亮賀くん



仲良く一緒に

帰宅するふたり。



びあねっと浜松 低性費かに自分らしく生きたい、暮らしたいと願う障がい者、高齢者を、ヘルパー派遣でサポートしています。

亮賀くんと、ヘルパーの後藤さんが向かうのは、いつものカラオケ屋さんだ。

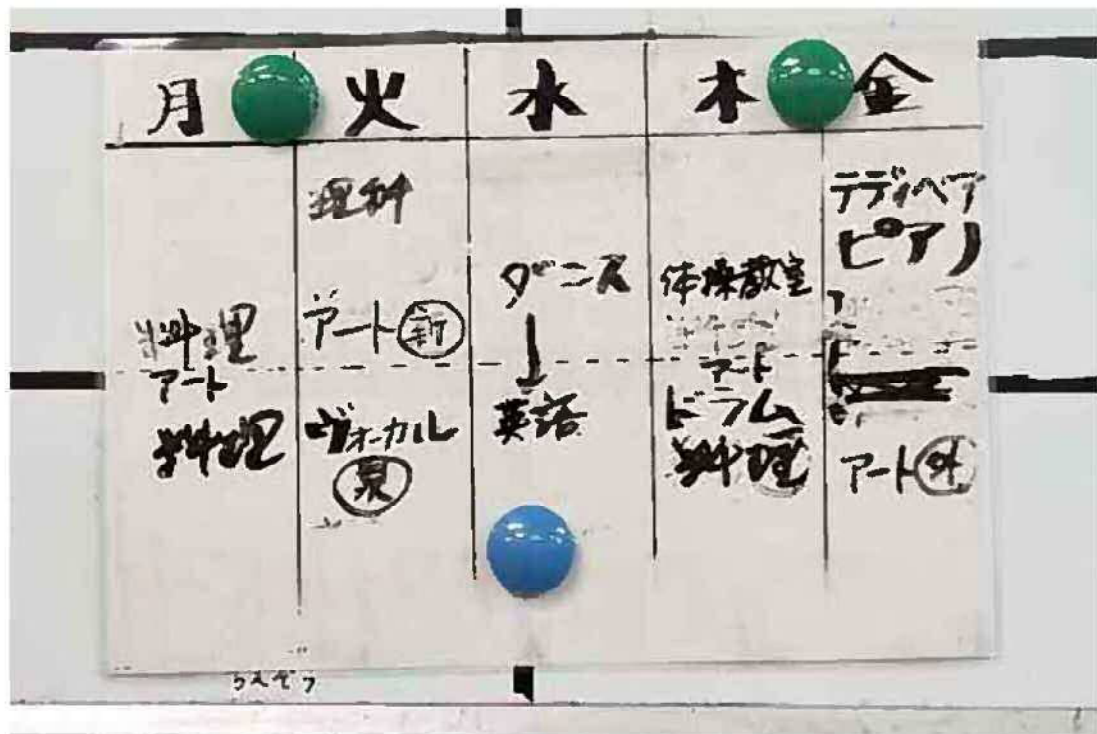
機械に入れるのは、亮賀くんお気に入り。の曲。亮賀くんのかけ声で後藤さんが合の手を入れれば、亮賀くんはそれだけでご機嫌で、飛び跳ねたり体を揺らしたり。亮賀くんのために、後藤さんは「あいあい」や「ジャングルポケット」に合わせてソリソリで盛り上げる。

カラオケを出て家に帰る道は、運動がてら会話を楽しみながら歩いたり、走り出しそうになる亮賀くんが危なくないように、とぎに優しく制したり。散歩もするし、二人で銭湯にも行く。あたりまえにつきあい、友達みたいに笑いあう。

後藤さんはときどき思う。

「一緒に銭湯に入ったり、カラオケ行ったり。おかしな職業ですよね」

それが、亮賀くんの日常、後藤さんの日常。



「何をやっているか」というよりは、「なぜ、それをするのか」「誰とするのか」というところに、彼らのカッドウの原点がある気がします。成長の通過点だったり、普段の暮らしだったり、自分自身からあふれ出る音やコトバの一つひとつが、他の人の心に届いたり。それがとても気持ちよかったり、時にはだれかをつき動かしたり。

人によって「なぜ」の理由は違いますが、その人が、その人らしく生きるカタチって、いつも誰かとのかわりの中で生まれてくるんじゃないでしょうか。